

第19回 詩

5年下で、再度詩が出てきます。それとともに、短歌・俳句と韻文と言われるものがそろいます。

「詩」は、説明的文章以上に得手・不得手がはっきりする分野だと思います。特に、抽象度が高いものになると何を聞かれているかが捉えにくく、必然的に何を答えたらよいか、分からないことになります。

指導する側も抽象的な問題は説明していて、どこまで分かってもらえるか不安になります。

予習シリーズ 216・217ページ 詩の種類とおもな表現技法を理解。

詩の種類は、小学生が学習するのは「口語」「自由詩」「叙情詩」がほとんどですから、(テストなどで)分からなかったらそれを書いておきなさい、としつこく言います。だが、いざとなると違う物を選んでしまうお子さんが出てきます。

表現技法は、比喩の「直喩」と「隠喩」の違い、「対句」が理解しにくいものなので、重点的に確認します。

ここまでは、例年のことなので2014.7.7日に記述しています。以降は7月8と11日の実際の授業中の様子から、それ以後に書きます。一方通行でない形で長年教えているとライブ・パフォーマーのように生徒たちの反応を見ながら、理解度や取り組み方で、教え方、どこに重点を置くかなどが変わってきます。

①

問一 例年、話を聞いていなさそうな生徒にあてる。口語詩・自由詩・叙情詩 覚えていて、確実に選択できるかどうかの確認のためです。

一旦、マスターするとなんの不安もない生徒もいれば、あとでプリントで同種の問題で幾度も間違える生徒も出てきます。大人感覚では、たかだかこの程度と捉えますが、子どもにとってはそうでないこともあるのです。

問二 (へたな絵を書いて、) 山頂から(青い大きな弧を描)水平線を見ている様子を想像させる。実際は、水平線が山より高ければ、水没してしまう。しかし、自分がいる山の山頂からいくつかの山越に海を見ると、あたかも水平線の方が高いかのように感じられる。同じように情景を詩のラストの3行で書かれていることに気づくとすばらしい。

問三 問題形式から簡単だが、入試問題ではその情景を説明させる問いが出ていた記憶がある。記述となると、表現が難しくなります。

問四 実際に聞いたことがあれば、想像しやすい。鳴き声が問いとは逆に「聞こえなくなるときの様子」を書いている選択肢を選ぶところが、ちょっぴり選びにくい。

問五 「適切でないもの」さえ、読めれば大丈夫のはず。ただ、「爽快感」がぴんとこない子もいる。清涼飲料のコマーシャルでは、よく使われる言葉ですが…。街の看板や

ポスターなどから、文字などの情報・知識を学ぶことが少なくなっています。

問六 五月が初夏という感覚がないため、八月にしやすい。若葉→初夏 短歌・俳句を学習すれば、その後は平気のはずです。ただし、今回は「四季のことば」という題名で、知識分野がこの種の学習です。シリーズP 225の夏、植物のところに出てきます。

問七 意外にできない。「感動しているのはどんなことですか。」詩の1・2行目と問二から呼びかけ（問いかけ）の「君は～があるか。」つまり、自分はそれを見て感動している。その感動を他人に伝えたいための詩である。冒頭の2行と最後の3行の文の関係がつかめるか。また、前述の問いかけの表現の意味が理解できるか。

問八 選択肢 ア 水平線 にしてしまいがちです。確かに、この高く感じられる水平線を見たことが感動の主原因ですから無理ありません。しかし、すべて問三・問四・問五にもあるようにそのような情景を見ることができて、爽快な気持ちになれたのも、山の頂上に来たからです。

2

問一 口語自由詩。このテキストの後に、前回書きました「やってもってらっしゃい」をしましたが、このプリントに漢字五字指定がありました。口語詩と自由詩をくっつけると六字になり、指定された字数にならないと、悩む生徒がいました。この問いで見覚えていれば、そんな悩みもおきないはずでしたが。

問二 「連」は、散文での段落に当たると事前に説明していますが、散文という言葉は使いません。「花は静かな微笑を見せている」選択肢に擬人法がないので、迷わずに比喻法。問五に関係してくる設問。

問五 意外に差が大きく出てくる記述問題。まず解答の最後の確認。「…どのようなことを…」と問いにあるので、「…こと。」

一連目の倒置から

紫大根の花が咲いていた
半日の外出から帰った夕暮れの
家の戸口の傍^{かたわ}らに



または

三連目から

昨年も
花はそこに咲いていたと
それさえ忘れていた私に
花は静かな微笑の姿を見せている

花 何の花→紫大根の花 そこ はどこ→家の戸口の傍^{かたわ}ら

□ 問いの文の確認

10行め「忘れていた私」とありますが、どのようなことを忘れていたのですか。従って単純に三連を使う。つまり何を言いたいかということ、分かっているののでつい一連目から解答してしまい、「昨年も」の部分を忘れてしまいがちだということ。

問八 この問題が大切だとおわかりでしょう。模範解答にある「認める」という言葉を使わなくても、(人間に)「知られなくても」、(自分を)「評価している」「ほめている」といった、砕いた表現であっても、書けるだけすばらしいことだと思います。

説明として、動植物は子孫を残すことが、DNAの中に組み込まれていて…と話して、しかしこの問いの答えに書く必要はないと言っているながら、書かせると「…子孫を残せるから。」と強く印象に残っているのか、書いてしまう生徒がいて、理解させるための背景説明と、答えに書くべき内容との区別がつきにくいようです。この種の説明をすると、毎回感じるのですが。

p, 221 発展問題

1

問八 記述問題として物語文でもよく出てくる比喻表現の問題。学習経験が無いと、5年生では思いつかないのが通例だと思う。

「風」 この誌では強い風で、邪魔な存在。あるいは邪魔をする存在。
ポプラの葉に絶えられているものが、われわれ人間であること。
人間にとって生きていく上で、その邪魔をするようなもの。
困難 苦勞 苦しさ 辛さ 不幸 悲しみ(さ) 試練 などなど
このあとに学習したプリントでは、甘酸っぱいが出てきた。

甘いと酸っぱい

甘いは 幸福 幸せ 喜び などプラスに働くもの
酸っぱいは、前述の困難などに似たもの。

プリントでの学習の際には、ヒントを言うと(前回の学習後のためか)理解が早かった。このほかには、「荒波」「悪天候」「夕暮れ」(その逆に日が昇る、晴天など)などが登場する。物語文の場合は、情景描写といえるが、少年向けの物語では自転車がよく登場する。

さて、別のプリントテキストでは、全く同じ詩が使われている問題がありました。問いで聞いていることが違っても、その違いを認識できずに、この問題の問七の解答を書いてしまう生徒が結構いた。問七をしっかりと理解していたとわかった反面、問題文を読んでいないのか、思い込みなのか、読んでも同じ問いにしか思えないのか、複雑な思いがした。